

雨あめふり

—

きようは雨あめふり。

康こういち一くんが目をさますと、屋根瓦やねがわらに、

「びちゃ、びちゃ」

と雨あまつぶが、はねている音おとがしました。

こんな雨あめの日ひには、井戸いどのそばの文ちゃんも、雑貨屋ざっかやの春坊はるぼうも、遊あそびには来こないので

す。こんどの日にち曜日ようびに、里井川さといがわの堤ていぼうへ、※フキを取りとに行いこうと約やく束そくしていたのです

が、雨ふりではしかたありません。

家には、お父さんとお母さんと康一くんと、四歳になる妹のみつ子ちゃんがいます。

康一くんは、寝ころがって外をながめています。

みつ子ちゃんは、

「ハルボウやフミねえちゃんは？」

と、雨つぶが流れおちる窓ガラスに、顔をおしあてて、つまらなそうにつぶやきました。

二

昼間だったけど、うす暗かったので、お母さんは電灯をつけて、その下で、ぬい物を

しながらいいました。

「雨の日はね、子どもはみんな、お家のなかで遊ぶんだよ。こんな日に外に出てったらね、矢田山から、キツネさんができて化かされちゃうんだよ。せきが「コンコン」って出て、とまらなくなっちゃうからね」

「みつちゃんは、おりこうさんだから、お外へなんか、いかないよね」

みつ子ちゃんは窓ぎわから、さっと飛びのき、お母さんの背中にかくれ、
「ほんと、ほんと」

と、お母さんの顔をのぞきこみました。

「ほんと、ほんとだよ。だからね、春坊も文姉ちゃんも、遊びに来れないんだよ。みつちゃんも、お家でじっとしてなきゃだめだよ」

みつ子ちゃんは、お母さんの※かつぼう着の袖を、しっかりとぎりながら、
“と、うなずきました。”

三

康一くんも妹くらいに小さかったころ、狐のはなしをきいて、雨ふりの日は外に出
なかつたそうです。

雨がすこし小降りになってきたころ、みつ子ちゃんは、

「おにいちゃんも、おそとに、いつちや、だめなんだよ。キツネさんに化かされちゃうから」
と、いいました。

「狐なんか来るもんか。そんなのメイシンだよ。みつ子は小さいから何でも本気にしちゃうんだ」

と、遊びにいけないので、おこったように、大きな声をだしました。

康一くんはもう三年生なので、たいていの事は知っていて、狐のはなしも迷信だということはわかっていました。でも、ほんとうは、ほんのちよっぴり怖かったです。

みつ子ちゃんは、お母さんを横目でみながら、口を、とんがらせて、いいました。

「でも、お母ちゃんが、いったもん。キツネさんに化かされちゃうって」

四

雨は強くなり、屋根瓦や窓ガラスに、

「バシヤー、バシヤー」

とあたり、

風は

「ビュー、ビュー」

と、うなり声を、あげはじめました。

小さな電灯をつけた康一くんの家の中のはなしは、聞こえなくなりました。

※フキ。春はるの初はじめめのころの山菜さんさい。

※かつぼう着ぎ。そでが付ついた長ながいエプロンのようなもの。家事かじをするときに着きる。